公民館の図書室は　学びの入口・みんなの本棚

# 図書室月報

2025年（令和7年）
12月5日 第751号

PDF版

国立市中1－15－1
TEL.042-572-5141
FAX.042-573-0480
国立市公民館

ブッククラブから

## 織田作之助 著『夫婦善哉（めおとぜんざい）』——〈大阪〉の裏地

君島 朋幸

今回の課題図書は、織田作之助『夫婦善哉』です。劇作家を志しながらも小説に転回していく若きオダサクが、同人誌『海風』7号（1940年4月）に発表した本作は、『文藝』（改造社）による新人発掘企画「文藝推薦」の一作に選ばれました。のちに映像化され、遊興に金を溶かす夫・柳吉と、彼を支える働き者の妻・蝶子といった型が広く受容されます。これにより本作は、オダサクを無頼派の一人として位置づける大きな役割を果たしました。

しかし、そもそも、オダサクは、何故このような作品を書いたのでしょうか。元々モダンでハイカラな戯曲や小説を発表し、当時の文壇の流行語でもあった「心理」にかぶれた彼が、人情味やユーモアに溢れた〈大阪〉的な表現を多分に盛り込んだ理由は、どこにあったのでしょうか。

尾崎名津子先生のお話は、まさにこの点に関わりました。鍵は当時の検閲体制にあります。近年発見された「続夫婦善哉」（1940年6月下旬～1941年？）に、その影響は顕著です。「続」の後半に大きな影を落とす戦争によって、自由な恋愛、脆弱な男性兵士（蝶子の弟）の身体、景気の悪化や物資の不足等を描くことが、総じて作品発表を困難にさせました。逆に言えば、そうした検閲をかいくぐるためにこそ、〈大阪〉的な風物、言葉、そして人間関係の描写が選ばれたのです。

なお、実在の地名や商品・食品名を用いてテンポよく進む関西弁の饒舌な語りは、実際の大阪の言葉と完全に同じではありません。厳しい時局において、物語を紡ぐ営みそのものを生き存（なが）えさせるために採られた、「似ている」のに「似ていないもの」——。それこそが〈大阪〉なのでしょう。今回わたしたちが触れたのは、そんな〈大阪〉の裏地に縫い込まれた、彼の創作に対する衝動や苦心だったのではないでしょうか。

他にも、金を溶かす夫を支える働き者の妻という型にも、先生は注意を促しました。本心を表に出さない柳吉の計算高さが窺える描写や、蝶子の節操のない信心深さ等が理由です。キタ＝近代的／ミナミ＝非近代的と分けられる大阪の空間的なイメージの撹乱や、蝶子と柳吉の都市労働者としての移動の解説にも膝を打ちました。

印象的だったのは、先生がふと「この小説を読むと、どうしてみなさんは自分のことを話したくなるのでしょう」と、笑いを交えながらお話しされたことです。たしかに、蝶子と柳吉の生き方に自分と「似ている」／「似ていない」ところを探してしまうのは、なぜなのでしょうか。ともすればそれは、「似ている」を通り越して、過度に「同じ」（国籍、人種、民族、言語、性差、身体……）であることを押しつけてくる息苦しい社会から、ひととき抜け出すために、「似ていない」誰かや何かと出会えるからこそ物語を求め続けてしまう、わたしたちの読み方、ひいては生き方そのものに関わっていそうですね。そんなことを妄想した、素敵な2時間でした。

（新潮文庫）

ブッククラブから

# 村田沙耶香 著『コンビニ人間』を読んで
## ―「コンビニ店員になった」から「なったのです」―

高田　功一

主人公は、コンビニエンスストアに勤務して、コンビニ店員になった。幼少期を振り返り、「普通」と相対する「奇妙」の二律背反に疑問を感じつつ、口をつぐむことで、世間と接して来た、と言う。一般的に普通（＝善）、奇妙（＝異常＝悪）と分ける基準は曖昧だ。通常「基準」には客観性が求められる。作者は作者なりの基準を設け、それを軸に、主人公と相手、普通と奇妙、どちらも互いに交差させ、物語りを進める。「えさを与える」あたりから、スピード感を増し、加速、一気に語る。逆転々々を繰り返し、周りを巻き込む。物語り、その構成秀逸だ。

文学とは何か、この問いが、久々に自分の中に甦った。世界の文学に夢中になっていた学生時代以来だ。50年は経っただろうか。作者は、筋の通った人間と、時代の典型的人物を対比させ、問いかけ、読者に考えさせる、そこに自分ははまった。

芥川賞は時代を映す、と講師の方は言う。文学は作品を通し、人間を残し、一つの時代を残す。作品によって、読者は、様々な人間、時代を見て感じることができる。本作にて作者が描いた時代、自分も社会で働いていた。行き詰まったこともあった。そんな時代を鮮やかに、そして滑稽に描き残した作者に敬意を表する。作者が描いたブレない人間。自己の主張を曲げず生きて行く人間。それはある意味美しい。その人物像を創り上げ、現代人と比べ、対比させ、考えさせる、意外性を感じ、飽きない。文学の醍醐味の一つを、十分味わった。

ブッククラブでは、多数の意見が聴けた。納得のいく考え、ハッとさせられた、いや違うと思うこともあった。意見を戦わせて、切磋琢磨する、そこに進歩が生まれる。人は突きあたっては、乗り越えて行かなければならない。だからこそ文学は必要だし、このような場も絶対に必要だ。今回参加させていただき、大変有意義な経験だった。

今、今の時代を考えている。あまりにもマニュアル化していないだろうか。仕事も勉強も、すべてにおいて、均一性が指向されている。本作品の主人公は語る。私はコンビニの部品、部品は修正される。マニュアル通りの動きは評価、やらなければ修正、つまり排除される。作品発表から約10年が経過、社会のマニュアル化はより顕著になっている。今後更に進む勢いが、昨今増加している。コンビニの部品、どうなるのであろうか。無人の店舗といったニュースを耳にする。〝効率化〟とは社会が求める最近の風潮だ。「いらっしゃいませ。」と、明るく、大きな声で挨拶するコンビニ人間、どうなっていくのか。今回本作を読み、作者の考えに接し、作者に非常に興味を持った。是非とも、作者と議論がしたい。自分に似ていない村田沙耶香は、どう考えているのか。コンビニ人間が、どう変わって出現するのか、非常に興味深い。

（文春文庫）

くにたちブッククラブ

**―自分と「似ているもの」/「似ていないもの」―**

**中島京子『夢見る帝国図書館』**
（文春文庫）

**講　師**　小平 麻衣子（おだいら まいこ）
（慶應義塾大学・日本近代文学）

**と　き**　12月11日（木）
夜7時～9時
※いつもと時間が異なります。

**ところ**　公民館 3階講座室

**申込先**　公民館　☎042(572)5141
またはホームページより申込

＊次回は1月8日（木）
三島由紀夫『金閣寺』
（新潮文庫）です。

＊ブッククラブ HP ▸

## 新着図書から

**〈総記〉**

町の本屋はいかにしてつぶれてきたか　飯田一史（平凡社）　024

本をともす　小谷輝之（時事通信出版局）　024

**〈哲学　心理学　宗教〉**

お寺に嫁いだ私がフェミニズムに出会って考えたこと　森山りんこ（地平社）　180

**〈歴史〉**

戦争を知らないキミへ上・下　竹村逸彦作（ポプラ社）　210

大学的多摩ガイド　塚田修一編（昭和堂）　213

**〈社会科学〉**

ロシア女たちの反体制運動　高柳聡子（集英社）　309

パレスチナ、イスラエル、そして日本のわたしたち　早尾貴紀（皓星社）　319

幸福の憲法学　木村草太（集英社インターナショナル）　323

憲法事件を歩く　渡辺秀樹（岩波書店）　327

ルーベンです、私はどこで生きればよいのでしょうか？　小田川綾音（西田書店）　329

社会は「私」をどうかたちづくるのか　牧野智和（筑摩書房）　361

労働をめぐるシスターフッド　辻智子編著（北海道大学出版会）　366

あなたのフェミはどこから？　安達茉莉子（平凡社）　367 あ

はじめての子ども論　元森絵里子（有斐閣）　367 も

子どもの人権を尊重するって、どうするの？　神原文子（解放出版社）　369

ケアと編集　白石正明（岩波書店）　369

子どもの体験学びと格差　おおたとしまさ（文藝春秋）　371

共生への学びの構築　佐藤一子編（東京大学出版会）　379

生涯学習概論　原義彦執筆・編集代表（ぎょうせい）　379

日本軍朝鮮人兵士　川口清史（かもがわ出版）　393

**〈自然科学〉**

ぼっちのアリは死ぬ　古藤日子（筑摩書房）　486

読んで楽しむ野鳥の事典　上田恵介鳥監修（成美堂出版）　488

傷つきやすさと傷つけやすさ　村上靖彦（ＫＡＤＯＫＡＷＡ）　490

ハンセン病差別の歴史を旅する　八木絹（かもがわ出版）　498

**〈工業〉**

ごみと暮らしの社会学　梅川由紀（青弓社）　518

**〈産業〉**

地図から消えた「沖縄農場」　新垣譲（論創社）　611

**〈芸術〉**

無言館はなぜつくられたのか　野見山暁治（かもがわ出版）　706

死を笑う　高橋繁行（創元社）　779

**〈言語〉**

日本語再定義　マライ・メントライン（小学館）　810

**〈文学〉**

「国語」と出会いなおす　矢野利裕（フィルムアート社）　907

辺境的　正津勉（作品社）　911 し

心の中にもっている問題　長田弘（晶文社）　911 は

ＹＡＢＵＮＯＮＡＫＡ ヤブノナカ　金原ひとみ（文藝春秋）　91 か

ありか　瀬尾まいこ（水鈴社）　91 せ

ひめゆりの塔　西平英夫（雄山閣）　91 に

朝のピアノ　キムジニョン（ＣＥメディアハウス）　92 キ

ギンガムチェックと塩漬けライム　鴻巣友季子（ＮＨＫ出版）　930

## 休室のお知らせ

### 公民館図書室の年末年始

**―休室期間―**

**12月29日（月）～1月3日（土）まで**

**12月28日（日）、1月4日（日）は午後5時に閉室します。**

公民館正面入口右側にある本の返却ポストは
12月28日（日）午後５時から
１月４日（日）午前９時まで使用できません。

### 公民館図書室 休室のお知らせ

蔵書点検のため、休室します。
ご理解とご協力をお願いします。

**―休室期間―**

**1月27日（火）～29日（木）まで**

※新聞は、休館日の月曜を除き
朝９時から夕方５時までの間
１階ロビーで閲覧できます。

図書室のつどい

# 地名の由来
## ―地名の始まりを知り、未来へ伝える―

お話　今尾 恵介（地図研究家）

私たちは、地図を見たり、新しい土地を訪れたりすると、普段耳にしない地名に出くわすことがあります。地名には「無形文化財」としての側面も併せ持つ数千年を超える歴史をもつものから、令和の現代に生まれたものまで、様々なものがあります。

本講座では、日本の地形、産業、暮らしの中から生まれた地名、江戸の街並みからつけられた東京23区の地名、多摩川流域の地形や新田開発の歴史に基づく多摩地域の地名などを取り上げます。多様な地名の成り立ちや魅力について理解を深め、未来に伝えていく意味・価値を考えます。

〈今尾さんの本〉『惹きつけ、惑わす、不思議な力　地名の魔力』（PHP研究所）、『地名散歩』（KADOKAWA）など多数

とき　1月18日（日）朝10時～12時
ところ　公民館　地下ホール
定　員　70名（申込先着順）
申込先　12月12日（金）朝9時～
電話または申込フォームより
公民館　☎042(572)5141

〈私の本棚から　第3回〉

村山早紀 著
# 『かなりや荘浪漫 ―廃園の鳥たち』

川越 彩心（あやみ）

この本は、私を救ってくれた本である。救ってくれた、とはそのままの意味で、正直、この本がなければ私はいなかったかもしれない、とたまに冗談抜きで思う。どうしても生きることが辛くて苦しくて堪らない時、夜にこの本を開くと、ふっと心が軽くなる。だから、今苦しんでいる人、生きることに楽しさを見出せない人、明日が毎日変わらずやってくることに疲れてしまった人、そういう人たちにこの本が届いてほしい。そういう思いで私は今回の文章を書いている。

この物語は、絵を描くことが大好きな19歳の少女、茜が、母親が失踪したことをきっかけに、クリスマスイブの日に大家に家を追い出されるところから始まる。そうして、雪がしんしんと降る聖夜に街を彷徨うこととなった茜は、不思議な縁で古い洋館アパート「かなりや荘」に辿り着く。そこには、心の中に、自分ではどうしようもできない荒れ果てた廃園を持ち、それでありながら他者を思いやる心はいつもあたたかに灯っている、そういう人たちが集まっていた。そこで泊めてもらうことになった茜は、偶然、そのアパートに住んでいた元敏腕漫画編集者に絵の才能を認められる。それを契機に、茜は自分を救ってきてくれた「絵」で、今度は自分が誰かを救おうと歩き出す―それがこの物語の粗筋だ。

この物語の魅力は、なんといっても文章一文一文、言葉一つ一つに散りばめられているぬくもりと美しさだろう。どんなに苦しいシーンでも、どれだけ絶望的な状況だとしても、静かに降り積もる雪のような、鋭い美しさと少しのあたたかみが常に共存している。また、この物語は「晴れた日の昼下がりにまどろむ瞬間」や、「寒い冬に猫を抱きしめて眠る夜」など、誰もが当たり前に見逃してしまう日常に溢れたぬくもりを、一つ一つ丁寧に掬い取って描いている。

心が荒れ果てて、もう何も残らなくなってしまった時こそ、強く正しい励ましの言葉よりも、日常にあふれた小さなぬくもりの方が、きっと人の心に光を灯すことができると、私は思っている。これは、優しく力強い、回復と救済の物語だ。どうか、あまりに優しくてあたたかいこの物語が、今苦しんでいる誰かの心に光を灯してくれますように。メリークリスマス。

（集英社オレンジ文庫）

## 係から

年末年始はゆっくりと本を楽しむ良い機会でもあります。お休み前にぜひ公民館図書室をご利用ください。